

送別の辞

——大森郁之助・川上徳明 両教授の退職にあたって——

遠田 晤良

平成十五年三月、日本語・日本文化学科の大森郁之助、川上徳明両教授が定年により退職された。お二人は開設間もない文化学部を今日まで先頭に立って牽引して来られた方々である。思い出のいくつかをふりかえり、多年の功績にいささか感謝の意を表したい。

文化学部は平成九年、短大部の国文学科・文化学科の改組転換によって開設されたが、大森教授は、文化学部開設と同時に短大部から移籍され、今日までの五年間を日本語・日本文化学科の一員として教育研究を牽引して来られた。かたわら山口学長の下で図書館長の重責を担われた文字通りの重鎮であった。

文化学部の一員としては、平成九年以降のことであるが、大森教授は、昭和四十二年札幌大学創設とともに教養部に招かれ、翌四十三年女子短大部開設に伴い国文科専任講師となり、四十七年助教授、四十九年教授に昇任され

た。着任以来三十六年の長きに涉り、札幌大学の歩みとともにその発展を担って来られた。

創設から間もなく札幌大学は深刻な経営危機に見舞われ、多くの教員が大学を去るといふ不幸な時代があった。短大部も例外ではなく、そのため大森氏はほとんど一人で国文科を支えていかねばならない時期がしばらく続いたと聞いた。

それだけに、多年にわたり心血を注いできた短大國文科（昭和四十六年国文学科に改称）への愛着と自負は人一倍強いものがあり、その時代を知らない私などの能天気な意見には、時折厳しい口吻でいらだちを見せることがあった。東京育ちの氏には、蝦夷地のガサツな触れあいがいつまでもなじめなかつたようだった。

国文学科の廃止にあたって、最後の卒業生を送り出すまではと、文化学部への移籍に一線を画そうとされたもの、はじめを重んじる氏の美学であったろうが、母胎を失う卒業生の心情に殉じたようにも見えた。雄弁な氏が文化学部の教授会では寡黙を通されたのも、それと通底するものがあつたと私には思われた。

教育に対してもきわめて熱心で、また厳格にして峻厳であつた。氏の講義をテープにとつて、さらにそれをノートに起こして、一字一句聞き漏らすまいと勉強している学生が多いと聞いた。たまたま卒業生に会えば、挨拶もそこそこに、まず、「大森先生はお変わりありませんか」と問われるのが常であり、それは今も変わらない。学生にも強烈な印象を与えた「忘れ得ぬ先生」であつた。

研究室に、ゼミ卒業生の寄せ書きが色紙になつて、年度ごとにずらりと張り巡らされているのは圧巻だった。厳しいが面倒見のいい、学生との交流のこまやかさが無言のうちに見てとれるようだった。著書のあとがきにわずかに記された夫人との結婚の経緯を発見して、ロマンチックないきさつに目を輝かせる学生も多かつた。ご本人は多

くを語らないが、札幌大学での三十六年間は、学生との豊かな思い出に彩られた幸福なものであったに違いない。氏は國學院高等学校の国語教諭として教員生活をスタートさせたが、ほどなく國學院大學文学部の講師を兼任された。旺盛な研究活動はその頃から今日まで衰えを知らず、著書十冊、紀要雑誌等掲載の論文は約百五十本になんなんとしている。まさに刻苦勉励の人である。

はじめ古典の世界に遊び、伝承文学に関する論文を多数発表されていたが、次第に近・現代文学に関心を移して行き、堀辰雄、立原道造、福永武彦、津村信夫など、いわゆる四季派の人々をはじめ、太宰治、横光利一、川端康成など、その人と作品にたいする犀利な分析を展開された。その中広い研究成果によって学会に独自の位置を占めておられることは周知のとおりである。

川上教授は、平成八年三月、すでに函館工業高等専門学校教授を定年退官されていたが、文化学部開設を機に、平成九年四月から日本語・日本文化学科の一員に招かれた。以来五年間にわたり、日本語概論、日本語史、文法論および書道担当の教授として、また、平成十一年からは日本語・日本文化学科長として学部の基礎固めにご尽力いただいた。

高等学校、高等専門学校等での豊かな教育経験をにじませた名調子の講義は、学生に非常に人気があった。私のゼミコンでもマイクに息を吹きかけながら、川上先生の鼻息だといって口まねする学生が毎年いた。

氏の授業はきわめて厳格で、一講目でも始業前に教室の前で待っていて、始業の鐘と同時に教室に入る事をずっと守っておられた。危うく滑り込み損なった学生が、出席簿の順番の早い自分の姓を呪っているのをよく聞いたも

のである。

学部開設と同時に、文部省に教職課程の設置認可を申請したが、中学国語免許取得のためには書道が必修であった。当初の担当予定者が年齢制限で不適格となり、急には適任者を得られず申請そのものがピンチに陥ったことがあった。

そんなある日、教授会の席上たまたま私が隣合わせて、氏がメモを取っているのを見るときもなく見たことがあった。走り書きなのに、実に風格のある文字である。ピント来た。「先生は書道の経験がおりです」と聞いてみたら、書道の経験も教授資格もあるとのことだった。渡りに船と無理にお願いして、それ以来ずっと教職課程専攻者のために、書道の授業を担当していただいた。酒席ではいつも、君に一杯食わされたと恨まれたが、その口振りは楽しげだった。先生が楽しいという以上に、学生には楽しい授業だったらいい。今でも良く卒業生の話題に出る。

文化学部の紀要「比較文化論叢」の創刊号から、退職された年の十一号まで、全号に欠かさず氏の論文が掲載されている。それはご自分でも満足の一つに数えておられたが、容易に真似のできることでないだけでなく、篤実な川上先生をもっともよく物語る事実であると私は思っている。

研究分野は、国語学であるが近年は特に語法研究に中心を置かれた。初期の頃は枕草子の読みに強い関心を抱かれたようであるが、万葉集から中古の物語・今昔物語と研究業績はきわめて広い分野にわたる。昭和50年ころから中古の仮名散文の命令・勧誘表現の体系化と表現価値を明らかにすることに関心を抱かれ、それへの取り組みが研究の中心課題になったように見受けられた。源氏物語をはじめとする中古散文はもちろん、広く古典の解釈や本文校訂に寄与する研究テーマであった。命令・勧誘表現の体系と表現価値の問題に一区切りが付き、まもなく一書に

まとめられると聞いている。

大森教授は退職後も大学にほど近い西岡に居住され、川上教授はご家庭の事情で、北海道を離れ鎌倉にお住まいになられます。お二方とも、退職されたとはいえますます壮健で、若者を凌ぐ体力気力の持ち主であることは誰しも認めるところ。今後ともますます健康で、悠々と研究を遂行される事を念願します。

お二方の数々のご功績に敬意を表するとともに、多年にわたるご厚誼に深く感謝申し上げます。

(日本語・日本文化学科長)